

平成二十七年二月二十三日 晴

嘗て國民の九十パーセントが自らを「中流」と意識しつつと、人類史上の快擧を成し遂げける我が國、されど自民黨主導の戦後保守政権にかゝる成果の得らるゝ筈なし、兔小屋の働き蜂が何でふ中流にあるべしと、文化知識人聲を揃へて冷笑す。バブル崩潰に伴ひ國富の喪はるゝや、年金の原資亦失はれたり、今の若人老齡になりて受取る年金保證なしと暗に年金保険料の支拂に疑念を抱かしむ。企業も終身雇傭は時代遅れ、自社の厚生保養施設も經費の無駄と、人件費の安き海外に進出、國內はリストラなる解雇相次ぐ。さすれば非正規雇傭にて、會社に忠誠一邊倒の生活より個人重視の人生をと、すべて少子高齢化に事寄せ、かくて日本的勤勞の慣習十年足らずの短き間に殆ど消滅す。

茲に「格差」なる語弘播するに至る。この語元來は格付けに於ける差を意味し、正規雇傭と然らざる者との賃銀格差などと使用す。然るに最近は更に博く、貧富の差、持てる者と持たざる者との差、即ち社會の矛盾の一つの代名詞ともなりぬ。我が國に於ける格差はなほ限定的なりと國會にて答辯せる安倍首相、質問の議員に「悲惨の母子家庭に思ひを致さずや」と追及せらる。今や格差は解決すべき最優先課題とぞなれる。

折も折、フランスの經濟學者トマ・ピケティ先生「二十一世紀の資本」を公刊、世界的ベストセラーとして、昨年末和譯も刊行せらる。フランス語の原典は讀む能はざるも、從來は不平等、不均等などと譯せる英語の *inequality* に當らむ語を「格差」と譯しつるは時流に適へりと見ゆ。而して格差解消の策として高額の富裕税を提案すと云々。

富の再分配は人類永年の課題なるも未だ最善の解答を見ず。マルクス主義盛んなりし頃は、共産主義こそ最終最良の解決なりと信ぜられき。然るにそのソ聯崩れ、アメリカ残る、その理由を考ふるに、再分配を行ふは誰かと問ふ必要あらずや。ソ聯式は金持より没收せる富を國家・政府が人民に分け與ふ。アメリカ式は政府施策の他、各種の慈善事業への寄附など種々ありてその一つに、新しき事業の提案を資産家親しく面接し資金提供を決斷するあり。兩方式の決定的の差異は分配の實施者にして、前者はその富の獲得には課税徴収以外何等貢獻なき政治家乃至政府職員なるに對し、後者は多くその富を獲得保持せる本人なり。ピケティ先生の富裕税は前者に屬するものの如し。

我が國にては江戸時代、「賣り家を唐様で書く三代目」なる川柳に代表せらるゝ富の循環あり。鼠小僧とて富豪を襲ひて奪へる財寶を貧しき者に與ふるあるはソ聯式なるか。明治以降は財を成すや、學校、病院を建て、古里の治山治水や南極探險など野心的計畫にも寄附する多し。一方近時の政策、生活保護、老人介護はもはら行政の司る所、民間の寄附には多額の税を課し、富者は消費、納税するのみの存在に貶しめらるれば、進みて慈善の心を動かすこと尠からむ。ソ聯の轍を踏むを憂ふ。

其の中にありて文語の苑への寄附頂くの有難さ心知るべきなり。